パブリック・アートとしての銅像

高山　陽子

1. はじめに

19世紀後半、東アジアの公共空間に銅像が登場した[1)]。日本では1880年、金沢の兼六園に明治紀念之標として日本武尊像が建立され、中国では上海租界に植民地行政官の銅像が建立された[2)]。こうした銅像の建立は、公園や広場などの西洋的な公共空間の誕生と連動しており、西洋美術の導入を含む近代化の過程で起こった。

皇居外苑の楠木正成像や上野公園の西郷隆盛像は、当時を代表する彫刻家、高村光雲（1852～1934）によって制作され、西洋彫刻の日本への導入および普及という美術史的な観点からも重要な銅像である。中国でも、杭州の西湖湖畔に建てられた「一・二八淞滬抗戦陣亡将士記念碑」［写真1］は、後に天安門広場の人民英雄記念碑の設計に携わる劉開渠（1904～1993）によって設計された。劉開渠は西洋芸術を学ぶためにフランスに留学し、帰国後、愛国心を鼓舞するような作品を制作した。銅像の黎明期には当代一流の芸術家が銅像を制作していたが、都市が銅像であふれる頃になると、無名の作家による銅像も増えていった。その典型的な例は毛沢東像であり、制作

［写真1］一・二八淞滬抗戦陣亡将士記念碑

者不明の毛沢東像が今も多く残っている。

日本では 1943 年から 44 年の金属供出と戦後の GHQ の間接統治を通して、多くの銅像が撤去された。銅像が撤去された公共空間には、平和の象徴としての少年少女の像や女性裸体像が置かれ、パブリック・アートと呼ばれるようになった[3)]。特に、平和を象徴するとされる女性裸体像は、多くの公共空間に設置されてきた[4)]。一方、1980 年代以降の中国では、英雄顕彰の銅像から地方性を表すモニュメントや芸術家の個性を表現した「城市彫塑」（都市彫刻）へ変り、パブリック・アートの一形態と見なされている。そして、社会主義的な都市計画において建設された人民公園や革命公園、烈士陵園などは、近年では太極拳やバドミントンなどのリクリエーションの場として使用されている。

このように公共空間と銅像の関係は社会的背景によって変化するものである。本稿では、中国の近代化の過程で誕生した公共空間とそこに建てられた銅像の関係を辿りながら、東アジアにおける銅像の意義を考察する。

2.　公園の誕生

西洋的な公園や広場が誕生する前、中国には、「園林」「花園」（庭園）、「公園」、「陵園」（墓地）など、囲まれた空間という意味を持つ様々な「園」があった。「園林」には、北京の円明園や頤和園などの皇家庭園と上海の豫園や蘇州の拙政園などの私家庭園の区別がある。ただし、私家庭園といっても全く排他的な空間であったわけではなく、唐代に造営された芙蓉園は一般に公開されていたという記述もあり[5)]、蘇州の拙政園や留園、獅子林などでは清明節や中秋節、その他の年中行事に際して近隣の人々に開放され、リクリエーションの場として使用された[6)]。

中国における公園は、公的な庭園や政府が所有する土地を意味していたが、明治日本の近代公園政策の影響を受け、西洋的な公園（public park）と内容が変化した。明治政府は 1873 年、太政官布告第 16 号により公園の設置を

法制化した。“Public park” の訳語として公園を用い、上野公園や芝公園、浅草公園などの西洋的な公園を建設した。公園という言葉は 19 世紀の中国に逆輸入され、上海租界に 1868 年に開園したパブリック・ガーデン（Public Garden）や 1914 年に開園したジェスフィールド公園（Jessfield Park）などに公園の概念が用いられた [7)]。

“Public” を「公」と訳すことは日本でも当初から問題視されており、「公用」は「御用」と同じであり、「公園」は「御上」のもの、あるいは「官園」と同義であると解釈された [8)]。“Public” と「公」のズレは、中国ではより顕著であり、首長制（国家）、共同性（社会）、倫理性（公平）という三つの意味がある「公」の概念は、孫文の「天下為公」という思想の基本になった [9)]。また、空間に着目するならば、公的な組織である「行」「幇」などの同業者集団は、会館という公共の場所を持ち、集会や儀礼などの際に利用していた。19 世紀末から 20 世紀にかけて上海で組織された善堂は、1949 年まで公的な活動を行っていたことが確認されている [10)]。

英国公使パークス（Harry Parkes）は、1866 年、横浜居留地に外国人専用の公園用地を幕府に要求した。この公園は山手公園として 1871 年、公式に開園した。居留民の公園開設への執着は当時の日本人にとってはかなり奇異なものであったとされる [11)]。公園への執念は上海でも同様であり、各国の銀行や商館が並び、人口が増加した外灘（バンド）に、1868 年 6 月、英国領事のウィンチェスター（Charles Alexander Winchester）が上海道の應宝時に北京路（現、北京東路）から外擺渡橋（現、外白渡橋）に至る浅瀬を娯楽の場所とすることを要請した。これに対して應宝時は、商業利用をしないことを条件に英国領事館前に公園を建設することを認めた。こうして、工部局は中国公有の土地を無償で西洋人に娯楽の場所として提供することとなり、同年 8 月 8 日にパブリック・ガーデンが誕生した。居留民用の公園であったパブリック・ガーデンは、中国が条約を結んでいる国の居留民に開放され、条約を結んでいない日本人、朝鮮人、インド人などには開放されなかった [12)]。

現在、黄浦公園と呼ばれるパブリック・ガーデンは当初、「公家花園」「西人花園」「黄浦花園」など様々な名称があった。19世紀後半の中国人にとって西洋式公園は、公的な庭園あるいは西洋式の庭園と捉えられていたことがわかる。上海には、中山公園の前身であるイギリス式庭園のジェスフィールド公園[13)]、フランス式庭園の顧家宅公園（現、復興公園）など多数の公園があったが、1928年までは原則的に居留民専用であった。そこで、上海道の聶緝規は、中国人専用の公園として、1890年、蘇州河に「公共花園」を建設した。「華人公園」「蘇州公園」「殷司公園」と呼ばれた公園には日時計や東屋が作られ、「寰海聯歓」（広く交歓する）という扁額が掲げられた[14)]。

公共墓地も公園と同時期に上海に登場した。1846年、英国は外灘の山東路に外国人墓地を建設した。礼拝堂を囲むように墓が整然と並び、柳や銀杏、椿などの木々が植えられた緑があふれる優雅な墓地の空間は、中国には存在しない墓地形態であった。外国人墓地は増え続け、老北門外国公墓や浦東外国公墓、八仙橋公墓、静安寺外国公墓、白頭公墓、以色列公墓、虹橋公墓、天主教公墓、穆斯林公墓などが建設された[15)]。

上海の人口は増え続けたものの、外国人墓地に中国人は埋葬されなかったため、中国人用の公共墓地の建設が待望された。そこで、1909年、虹橋に中国人が経営する共同墓地として薤露園が建設された。後に薤露園は、国籍および宗教を問わない万国公墓となり、外国人墓地の影響を受けつつ、中国式の読経を行う追想庁も置かれた。この頃から上海で葬儀および墓地の改革の必要性が叫ばれ、その過程で記念建造物の性格を持つ烈士墓や無名兵士の墓が建設された[16)]。

公園や公共墓地とともに公共体育館も作られた。公共体育館は遊戯やスポーツの場としてだけではなく、1911年の上海蜂起や1925年の五卅惨案、北伐、1932年および1937年の上海事変などの革命犠牲者の追悼大会の場としても利用された。革命のために命を落とした烈士は、私的な空間で親族のみで葬儀を行うのではなく、公的な空間で行うことが望ましいと考えられるようになっていった。娯楽や社交の場として建設された公共の場は、時

［写真 2］中山堂

には政治的な空間として利用されることもあった。公的な葬儀を営む大きな契機となったのは、国民政府が 1916 年に公布した国葬法であった。国葬法に従って、1917 年 4 月、蔡鍔と黄興の国葬が長沙で行われた。1925 年 3 月 11 日に死去した孫文の遺体は、追悼会のために中央公園の拝殿（現、中山堂）［写真 2］に移された。孫文追悼会は北京や上海、広州などの学校や公園で開催されると同時に、中山大学と中山公園の建設が計画された[17)]。

20 世紀の中国において公共墓地の建設が急速に進んだのは、広い土地を必要とする伝統的な土葬墓や一族墓を減らす実用的な背景があった[18)]。さらに、追悼会や国葬という新しい葬儀の形は革命で犠牲になった英雄を祀るために必要な制度であった。このように、公共空間における式典と記念碑建立という一連の流れは、近代国家が必要とした英雄崇拝の礎を築くものであった。

3. 英雄顕彰碑

孫文の追悼会が行われた北京の中央公園は、500 年以上の歴史を有する社稷であった。辛亥革命後、北京では頤和園や円明園、北海などの皇家庭園が公園として一般公開され、社稷も 1914 年、中央公園となった。孫文の追悼会の前には、米国大統領ハーディングの追悼式が 1923 年 11 月 18 日に行われ、オベリスク型の記念碑が建てられた。1924 年 10 月には、辛亥革命灤州起義群総司令の施従雲と大都督の王金銘の銅像が建立され、また、山東省済南で国民革命軍と日本軍の間に起きた武力衝突（済南惨案）で死亡した蔡公時らの 16 名の追悼大会が 1928 年 7 月 5 日に行われ、その後、蔡公時と済南

惨案の烈士記念碑が作られた[19]。

1920年代から30年代における大規模な追悼会と記念碑建立の代表は、五卅烈士と陳英士のものであった。1925年、上海の日系紡績工場で働く労働者たちが賃上げや解雇者の復職を求めて起こしたストライキは、学生を中心とした抗議運動は反帝国主義運動に拡大し、5月30日、打倒帝国主義と経済絶交を掲げたデモ行進が行われた。英国警察はデモ隊に向かって発砲し、数十名を逮捕した。何秉彝や尹景伊などの学生を含む13名は「五卅烈士」と呼ばれ、1925年6月30日午後2時10分、上海の西門の公共体育館において大規模な追悼会が行われた。5分間、鐘が鳴った後、上海の実業家の鄔志豪が、何秉彝や尹景伊、陳虞欽、唐良生、石松盛、陳兆長、朱和尚、鄔金華などの名の烈士を追悼し、彼らの死は決して無駄ではないことを述べた。代表らによる三礼の後、厳諤声が祭文を読んだ。5分間の黙祷後、不平等条約の撤廃、租界の回収、国民絶交、烈士の不死が叫ばれた。祭壇の右側には烈士の衣服と「血涙」の文字、左側には烈士の写真と「傑雄」の文字が掲げられ、下には何秉彝が着用していたスーツ、陳虞欽や陳兆長の長袍、身元不明の死者の衣服が置かれた。追悼会に20万人が参列した。1926年5月29日、烈士公墓の除幕式が行われ、5000人が参列した。翌日には、公共体育館で追悼式が行われた。10時に始まった式は、開会、奏楽、主席報告、黙祷、奏楽、電報紹介、講演、スローガン喚呼、奏楽、閉会と進行した[20]。五卅烈士墓には半球の上に鶏が乗った記念碑と三角屋根を持つ四角の記念碑が作られた。正面に譚延闓による「来者勿忘」の文字、側面に25名の烈士名、裏面に碑文が刻まれた[21]。

1930年、西門外の中華路と方斜路が交わる空き地に陳英士記念塔が建てられた。浙江省呉興出身の陳英士（陳其美、1878～1916）は、1911年11月3日、光復会らとともに上海蜂起を決行した。後に中国革命党に加わり、袁世凱討伐にあたった陳英士は、1916年5月18日、袁世凱の刺客により暗殺された。死後、陳英士の記念大会は毎年5月18日に各地で開催された。例えば、1927年5月18日には、南市公共体育館と閘北青雲路、江湾、静安

寺などで開催され、南市公共体育館の記念大会には蒋介石や海軍総司令の楊樹荘をはじめとする多くの要人が参列した。体育館の壇上には孫文と陳英士の遺影が掲げられ、その左右に国旗が掲げられた。式典は、開会宣言、鐘鳴、奏楽、遺影への3度鞠躬、蒋介石による孫文の遺言の朗読、3分間の黙祷、開会趣旨の報告、献花、哀悼の詩の朗読、蒋介石による演説、楊樹荘や宮崎龍介らの演説、英国帝国主義への抗議、革命歌唱歌、スローガン喚呼、鐘鳴、奏楽、閉会と進行した[22)]。

陳英士記念塔の建設計画は、蒋介石と張群上海市長、初代上海市長の黄膺白（黄郛）の3人によって進められた。1930年5月18日、西門外の空き地で記念塔の着工式が実施され[23)]、同年11月3日に落成式が行われた。高さ27メートルの鉄筋コンクリート製の記念塔は、外側に金メッキが施され、これまでの上海には存在しなかった類の建造物として人々の関心を集めた。落成式には、蒋介石代理の黄膺白、立法院長代理の焦易堂、張群、立法委員ら1000人ほど、陳英士夫人と親族ら20名ほどが参列した。式典は、開会式、演奏、党歌唱歌、党旗と国旗および孫文への3度鞠躬、孫文の遺言の朗読、黙祷、開会の詩の朗読、演奏、除幕、演説、演奏、閉会と進んだ。演説の中で張群は、この記念塔が「上海市の公共建築の中で最高峰であるといっても過言ではない」と述べた[24)]。

こうして、体育館や広場、公園などの公共空間における演奏や黙祷、献花、追悼詩の朗読、演説、スローガン喚呼といった行程を含む追悼大会の形式が確立し、犠牲者は「英霊」や「先烈」、「烈士」と称されるようになった。

20世紀初頭の杭州にも公園と銅像のある風景が作られた。城壁が撤去された西湖の湖畔は、第一から第五までの近代公園となり、上海市民にとっての格好の行楽地となった。さらに、図書館や運動場、東西と南北に延びる道路が建設され、1918年には現在の杭州解百の前身となる国貨陳列館が開館した[25)]。そして、1929年6月6日に開幕した西湖博覧会の会場には、革命記念館、博物館、芸術館、農業館、教育館、衛生館、絲綢館、工業館、特種

陳列所、3考陳列所、滬杭甬路局陳列処、交通部電信所陳列処、航空陳列処の全13施設が並んだ。芸術館には、孫文像や古代から現代までの書や青銅、油絵など数千点の作品が展示された[26]。

芸術館主任を務めたのは、ドイツとフランスへの留学経験を持つ林風眠（1900～1991）であった。林風眠は1923年、林文錚や李金発とドイツへ向かい、翌年、パリに移った。林風眠は1924年5月から7月にかけてフランスのストラスブールで開催された「中国古代および現代芸術展覧会」（Exposition chinoise d'art ancien et moderne）に「生之欲」や「模索」などの42作品を出品した。林風眠の「生之欲」は、北京大学総長を辞任し、ベルギーに滞在していた蔡元培（1868～1940）に感銘を与え、1925年、北平芸術専門学校の校長に招聘されるきっかけとなった。1927年4月に南京国民政府が成立すると、蔡元培は国民政府に参加し、大学院長に就任した[27]。翌年、林風眠は蔡元培が杭州に創設した杭州国立芸術院に赴任し、1925年のパリ国際装飾芸術・現代産業博の審査員を務めた経験があったことから、西湖博覧会の芸術館主任として出展作品の選別から作品の配置や建物の外観に至るまで指示を出した[28]。

西湖博覧会が開催された当時の杭州は、国民政府の首都の南京と並ぶ教育の中心地であった。博覧会開幕に際して陳英士の騎馬像が落成した。湖浜公園の第三埠頭に設置された像の除幕式には、国立中央大学校長の朱家驊が献花し、中央委員の褚民誼、工商部長の孔祥熙らが参列した[29]。1934年には、劉開渠が設計した一・二八淞滬抗戦陣亡将士記念碑が完成した。この記念碑は、1932年1月28日の上海事変で犠牲者となった国民革命軍陸軍の1421名を追悼するものであり、台座には「抵抗」「冲鋒」「継続殺敵」「紀念」の4つのレリーフと、碑身に「陸軍第八八師淞滬抗日陣亡将士記念塔」と刻まれた。

劉開渠は、フランス留学後、杭州芸術専科学校（後に、中央美術学院華東分院、浙江美術学院と改名）校長、中央美術学院副院長、中国美術館館長を歴任するなど、中国彫刻界の重鎮となった。劉開渠は天安門広場の人民英

雄記念碑の美術工作組の主任として、北面の「勝利渡長江、解放全中国」「支前前線」「歓迎人民解放軍」を制作した。人民英雄記念碑は、1952 年に組織された人民英雄記念碑興建委員会において、北京市長の彭真（1902 ～ 1997）が主任に、鄭振鐸（1898 ～ 1958）と梁思成（1901 ～ 1972）が副主任に就任することが決定し、主な設計はペンシルバニア大学とハーバード大学で建築を学んだ梁思成が担当した[30)]。

［写真 3］天安門広場

北京の中央公園や上海の公園、杭州西湖の公園などの新しい公共空間は、西洋思想を学んだ知識人や封建的家族制度から解放された女性たちに娯楽や社交の場だけではなく、公的な追悼や集会といった政治的な活動の場も提供した。公共空間における銅像や記念碑の建立は、若い芸術家が学んだばかりの近代芸術を実践する格好の機会であった。「人民」「革命」「中山」「労働」などの名称を持つ公園や広場と記念碑の組み合わせは、1950 年代、ソ連の社会主義リアリズムの本格的な導入とともに各地に広がっていった。また、烈士陵園が各地に建設され、その入口の広場には烈士顕彰碑が置かれた。こうして公共空間に高く聳える記念碑や銅像のある社会主義的な風景が広がっていったのである［写真 3］。

4. 社会主義的身体表現

1949 年以降、西洋列強や国民党が建立した銅像の多くが撤去された。大連に大広場の初代関東都督の大島義昌（1850 ～ 1926）の全身像は 1946 年 6 月 1 日に同広場が中山広場と改名された際に撤去された。長春では、児玉源太郎の騎馬像のあった西公園は勝利公園となり、毛沢東像［写真 4］が置か

［写真 4］毛沢東像

［写真 5］黄浦公園

れた。大同大街は人民大街、大同公園は中正公園、人民公園、紅領巾公園、再び人民公園、児童公園と幾度も名前を変えた。上海では、陳英士記念塔が 1950 年代に取り壊され、パブリック・ガーデンが黄浦公園［写真 5］、競馬場が人民公園と人民広場に変わった。浦東外国公墓と八仙橋外国公墓、静安寺外国公墓はそれぞれ浦東公園、淮海公園、静安公園となった[31)]。

1949 年 3 月、中国共産党は各省政府に対して清明節に烈士記念会を開催し、碑に烈士の名前を刻み、陵園内に植樹すること、清明節を「烈士節」と定め、烈士の遺品を収集・調査すること命じた[32)]。1950 年、烈士の身分が辛亥革命、北伐、第一次国共内戦、抗日戦争、第二次国共内戦、五四運動以降の反帝国主義闘争で死亡した人々と正式に定められた[33)]。烈士の家族は「烈属」と呼ばれ、その範囲は両親・配偶者・子供・16 歳以下の兄弟姉妹と定められた。軍人の家族である「軍属」と同じく、「烈属」は土地や農具、食料などを優遇されるほか、医療費の減免や学費の補助などが受けられた[34)]。

烈士陵園は北京の八宝山革命公墓の建設を契機に全国で整備された。1949 年 12 月、王荷波（1882 ～ 1927）［写真 6］ら 18 名の烈士が八宝山革命公墓に移送された際に、300 名ほどが参列した追悼会が開催され、周恩来が祭文を読んだ。追悼会が終ると、周恩来と「烈属」らが墓に土をかぶせた[35)]。

［写真 6］王荷波等烈士の墓

［写真 7］八宝山革命烈士公墓

陳英士像などの銅像は 1930 年代にも建立されていたが、烈士の多くは追悼式における遺影、あるいは伝統的な石碑や位牌を通して追憶されることが多かった。遺影をはめ込んだ墓石や公共墓地における記念碑の建立は八宝山革命公墓が先駆けであった［写真 7］。

こうした烈士の顕彰を形式化する上で大きな影響を与えたのは、ソ連の社会主義リアリズムであった。ソ連の社会主義リアリズムは 1933 年に公式に定められ、1941 年に始まったスターリン賞において、1934 年から 1940 年に制作された作品からスターリン像 4 点、レーニン像 1 点、勤労者像 1 点などが表彰された。その中で最も注目されたのが、1937 年のパリ万国博覧会に展示されたムーヒナ（Vera Ignatyera Mukhina, 1889-1953）の「労働者と女性コルホーズ員」であった[36)]。この作品の模型は、1952 年 10 月、北京で開催されたソ連博覧会で展示され、「不朽の傑作」と賞賛された。また、展覧会開催に際して、ソ連の美術学院院長のゲラシモフ（Alexander Gerasimov, 1881-1963）が訪中し、また、レーニンのプロパガンダ計画（1918 ～ 1922 年）の文献が中国語に翻訳され、積極的にソ連式の社会主義リアリズムが導入された[37)]。中央美術学院教授の江豊（1910 ～ 1982）は、芸術分野における彫刻の遅れを指摘し、公園や広場に英雄を顕彰するための記念碑建築が作られるべきであると主張した[38)]。

ソ連式の記念碑は旅順やハルビンなど東北に多く作られた[39)]。1945 年 8

［写真8］中ソ友誼塔

月から1955年まで旅順に駐留したソ連軍の撤退に際して、フルシチョフは記念碑の建設を提案した。大連のスターリン広場（現在の人民広場）のソ連烈士記念塔（1955年）[40]、旅順のスターリン路の勝利記念塔（1955年）、旅順博物館前の中ソ友誼塔（1957年）の3つが建設された。中ソ友誼塔の台座には「中ソ人民大団結群像」というレリーフが施された［写真8］。台座の正面にはクレムリンと天安門が彫られ、両側面にはソ連の専門家たちが中国の工業と農業を援助する様子が描かれ、背面には旅順市の風景が用いられた[41]。

1959年、北京の天安門広場に人民英雄記念碑が落成した。毛沢東による「人民英雄永垂不朽」（人民英雄は永遠に不滅である）という題字と革命を描いたレリーフの台座という中国特有の記念碑の様式が登場した。同年、農業展覧館の前に「慶豊収」（豊作を祝う）［写真9］が除幕した。これは、魯迅美術学院彫塑系の教員および学生らが制作した18名の農民と4頭の馬を刻んだ一対の彫像である。馬上の男性は上半身裸で太鼓のばちを掲げ、もう一方の馬上の女性は鐃鈸（中国式のシンバル）を高く掲げている。公共の彫像という新しい形式を用いて農民の姿を描いたこの時代特有の作品であるとされる[42]。

［写真9］慶豊収

1960年代に入り、中ソの対立が表面化すると、ソ連の社会主義リアリズムの影響を受けながらも中国特有のプロパガンダ・アート

［写真 10］毛沢東思想勝利万歳

［写真 11］兵士と農民の像

の様式が生まれた。この様式は 1942 年の延安講和に基づく毛沢東様式と呼ばれ、芸術のための芸術を否定し、社会主義思想を表現するものとされた。1960 年代後半から毛沢東崇拝が広まる中で、おびただしい数の毛沢東のポスターが印刷され、各地に毛沢東像が登場した。ポーズは右手を掲げているものが多いが、手のひらの角度は様々である。人民帽をかぶって右手を掲げるもの、右手を掲げて左手に人民帽を握るもの、右手を掲げず人民帽を持ったものなどがあり、台座には何も書かれていないものと、「偉大な領袖であり指導者である毛沢東は永遠に我々の心の中に生き続ける」と書かれたものがある。文革期に「粗製乱造」された毛沢東像の制作者は不明であるが、その中でも最も有名で、現在でも芸術的に高く評価されるのは、1970 年、瀋陽の紅旗広場（現、中山広場）[43] に建設された、「毛沢東思想勝利万歳」である［写真 10］。高さ 10.5 メートルの毛沢東は、56 名の兵士と農民に囲まれている。正面から向かって左側は、「井岡山的星火」、「抗日烽火」、「埋葬蒋家王朝」、右側は「社会主義好」、「三面紅旗万歳」、「無産階級分化大革命勝利万歳」の計 6 つの彫像が台座を飾る。1976 年、毛主席記念堂の広場に建設された兵士と農民の像［写真 11］は、この像をモデルにしている。

「慶豊収」と、「毛沢東思想勝利万歳」は、毛沢東様式あるいは社会主義リアリズムの特徴を顕著に示す。すなわち、6 頭身から 7 頭身の太い手足と首、上をにらんだ視線、眉間の皺、ヘルメットやタオルなどの労働者を表す小道

［写真 12］北京中山公園の孫文像

［写真 13］孫中山記念館前の孫文像

具、毛沢東バッジと紅衛兵の腕章などである。こうした社会主義的な身体表現方法は 1980 年代以降、減少していった。

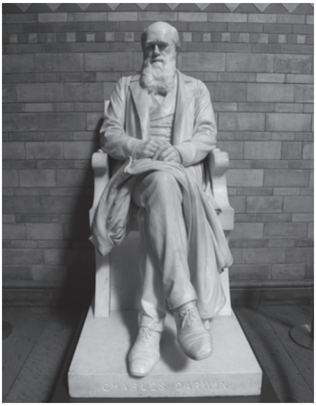
文革終了後、毛沢東様式はソ連の社会主義リアリズムを模倣しただけの「後衛的なアート」であり[44]、ソ連と同様に、社会主義リアリズムとは何かという議論がされることはなく、これに反するものだけが特定される中心不在の様式だったと批判された[45]。しかし、近年、プロパガンダ・アートが中国の現代芸術に与えた影響は非常に大きい[46]と指摘されるように、パブリック・アートの普及という点では幾ばくかの貢献をしたといえる。孫文や魯迅の銅像が各地の公園や広場に登場したのも 1980 年代以降である。中央公園から中山公園と名前を変えた北京の中山公園には、孫文逝去 60 年を記念して 1985 年 11 月 12 日、北京の中山公園に孫文像が作られた［写真 12］。人物像の高さは 3.4 メートル、台座の高さは 1.6 メートルで、題材には「偉大な革命先行者の孫中山先生は永遠に不滅である」と鄧小平が揮毫した。また、2006 年にリニューアルされた上海の孫中山記念館の前にも孫文像が登場した［写真 13］。各地で建立される孫文像と 1929 年の西湖博覧会の芸術館の孫文像を比べると、前者が 8 頭身から 9 頭身であるのに対して、後者は 6 頭身ほどである。この傾向は魯迅像にも当てはまり、8 頭身で優雅に座っ

［写真 14］上海魯迅公園の魯迅像

［写真 15］西湖湖畔の魯迅像

ているものが多い［写真 14］［写真 15］。

人物の銅像には、立像、騎馬像、坐像、胸像、群像といった種類がある。最も多いのは室内にも設置できる胸像である。毛沢東や孫文、周恩来などの著名な政治家と烈士や労働者には立像が用いられるが、ポーズが異なる。政治家は静かに立っているものがほとんどであるが、烈士や労働者は［写真 10］や［写真 11］のように足を開き、手を高く上げて躍動感を表すことが多い。騎馬像は、西欧では王侯貴族と軍人に使われるが、中国では陳英士像を除くとほとんど制作されず、特に 1949 年以降、騎馬像は「ブルジョワ的」とされ、ほとんど見られなくなった。近年になって、歴史上の武将が騎馬像で制作されている。



［写真 16］ダーウィン像

［写真 17］フンボルト像

坐像になるのは、ダーウィン像（ロンドン）［写真 16］、フンボルト像（ベルリン）［写真 17］、コペルニクス像（ワル

［写真 18］コペルニクス像

［写真 19］バイロン像

［写真 20］ディドロ像

［写真 21］松尾芭蕉像

シャワ）［写真 18］、バイロン像（ローマ）［写真 19］、ディドロ像（パリ）［写真 20］、松尾芭蕉像（東京）［写真 21］など、歴史に名を残す文化人である。中国で最も有名な坐像は、1977 年に落成した毛主席記念堂内部の毛沢東像である。この記念館の設計を担当した南京大学建築系教授の楊廷宝（1901 ～ 1982）は、若い頃にフィラデルフィア大学で建築を学んだ経験を持ち、1922 年に完成したワシントン D.C. のリンカーン記念堂［写真 22］の建築様式の影響を強く受けて毛主席記念堂を設計したとされる[47]。坐像には、上海の魯迅公園と杭州西湖の魯迅像や上海の徐啓光像［写真 23］、紹興の蔡元培像［写真 24］があり、大半が文化人である。江西省井岡山の大井における若い頃の毛沢東も座った姿であり［写真 25］、上海の宋慶齢陵園におけ

［写真 22］リンカーン記念堂

［写真 23］徐啓光像

［写真 24］蔡元培像

［写真 25］井岡山の毛沢東

［写真 26］宋慶齢陵園の宋慶齢像

［写真 27］秋瑾像

る漢白玉の宋慶齢も坐像である［写真26]。宋慶齢陵園はかつての万国公墓であり、1981年、宋慶齢が万国公墓に埋葬された後、1984年、宋慶齢陵園と改名され、宋慶齢像や記念碑が作られた[48)]。数の少ない女性像は、宋慶齢像のように主に漢白玉で作られる。辛亥革命の先駆者とされる秋瑾像は、1981年、西湖の西冷橋に墓が修復された際に建てられた［写真27]。この時期になると、秋瑾が革命のシンボルであることが公的に認められ[49)]、1997年には紹興の秋瑾記念碑の東側に秋瑾記念広場と秋瑾像が建てられた。

5. パブリック・アートへ

都市の公共空間に作られた銅像や記念碑は、かつての英雄顕彰碑も含めて城市彫塑と呼ばれるようになった。1982年に成立した全国城市彫塑規劃組織は、1992年には全国城市彫塑建設指導委員会に改名し、各都市の城市彫塑の指導及び管理に当たった。質と量を維持するため、城市彫塑の設計担当者は、城市彫塑創作設計資格証書を持つ芸術家に限定され、作品の思想と芸術的水準を高めることが要求された。さらに、城市彫塑を制作する際の参考として、全国城市彫塑規劃組織の下に設置された彫塑芸術委員は中国共産党の指示に従って、人物モニュメントのリストを発表した[50)]［表1]。

第一カテゴリーには、マルクスやエンゲルス、レーニン、毛沢東、周恩来、宋慶齢、彭徳懐などの革命家の名前が連なり、第二カテゴリーには、蔡元培や魯迅、廖仲愷、聞一多、郭沫若、沈鈞儒などの近代以降文化人および政治家が中心となった。第三カテゴリーは張騫や岳飛、諸葛亮、孫文などの歴史上の人物、第四カテゴリーは古代から現代に至るまでの文人、第五カテゴリーは天文学や数学、医療などの分野で活躍した人物、第六カテゴリーはベチューンやスメドレー、スノーなどの外国人が置かれた。第七カテゴリーには、朝鮮戦争で戦死し「特級戦闘英雄」の称号が与えられた黄継光や楊根思、毛沢東による「人民に奉仕する」の演説で死を称えられた張思徳、「雷鋒に学べ」のキャンペーンで知られる雷鋒、女性革命烈士の趙一曼や劉胡蘭

［表 1］城市彫塑リスト

（全国城市彫塑建設網 http://www.diaosu.com.cn/about_info.asp より作成）

1	マルクス、エンゲルス、レーニン、毛沢東、周恩来、劉少奇、朱德、任弼時、董必武、彭德懐、賀龍、陳毅、宋慶齢、羅栄桓、林伯渠、李富春、王稼祥、張聞天、陶鋳、李大釗、瞿秋白、蔡和森、向警予、鄧中夏、蘇兆征、澎湃、陳延年、惲代英、趙世炎、張太雷、李立三、方志敏、劉志丹、黄公略、許継慎、豊拔群、趙博生、董振堂、段德昌、楊靖宇、左権、葉挺、黄興、蔡松坡、吉星文、趙登禹、張自忠、高志航、謝晋元
2	蔡元培、鲁迅、廖仲愷、何香凝、鄧演達、楊杏仏、沈鈞儒、鄒韜奮、郭沫若、茅盾、聞一多、楊虎城、李済深、張瀾、黄炎培、陳叔通、彭沢民、程潜、傅作義、李公朴、柳亜子、張謇、範旭東、栄德生、劉鴻生、劉国鈞、楽松生、盧作孚、張之洞、李烛尘、侯德榜、馬本斎、ソンツェン・ガンポ、鄭和、陳嘉庚
3	孫武子、孫臏、霍去病、張骞、陳胜、呉広、黄巣、諸葛亮、岳飛、韓世忠、戚継光、文天祥、李自成、鄭成功、康熙、黄宗義、王夫之、林則徐、洪秀全、孫文、丁汝昌、鄧世昌
4	孔子、屈原、鐘繇、王羲之、顧凱之、李白、杜甫、白居易、柳宗元、陸游、呉道子、楊惠之、閻立本、蘇東坡、辛弃疾、関漢卿、羅貫中、施耐庵、呉承恩、蒲松齢、呉敬梓、曹雪芹、聂耳、冼星海、田漢、陶行知、徐悲鴻、斉白石、梅蘭芳
5	大禹、甘德、石申、扁鵲、張仲景、公輸班、張衡、司馬遷、祖冲之、賈思協、酈道元、李春、僧一行、孫思邈、黄道婆、華升、沈括、郭守敬、李時珍、宋慶星、唐福、玄奘、徐光啓、詹天佑、馮如、華蘅芳
6	ベチューン、アグネス・スメドレー、アンナ・ルイス・ストロング、ドワナト・サンタラム・コートニス、エドガー・スノー
7	黄継光、邱少雲、羅盛教、楊根思、楊連第、雷鋒、王傑、劉英俊、謝臣、羅光燮、司馬義、買買提、龐国興、楊建章、梁英瑞、李成文、岩龍、呂士才、張華、扎江、張思德、董存瑞、狼牙山五壮士、向秀麗、安業民、欧陽海、劉文学、安柯、張志新、馬約翰、呉伝玉、容国团、黄愛、龐人銓、施洋、黄静源、陳賛賢、劉尔松、汪寿華、劉華、李啓漢、周文雍、王荷波、郭亮、林育南、楊殷、張浩、鄧発、茅麗英、節振国、王孝和、趙占魁、孟泰、李永、王進喜、趙春娥、趙梦桃、羅健夫、蒋筑英、張同星、徐寿、郭隆真、高恬波、劉和珍、張挹蘭、游曦、毛沢建、伍若蘭、楊開慧、ā鏗、黄励、徐全直、何宝珍、呉富莲、茅麗瑛、李林、趙一曼、江竹筠、劉胡蘭、趙春娥、抗聯八女投江、廖承志、呉玉章、蔡鍔、秋瑾、章太炎、宋教仁、譚嗣同

［表2］全国重点文物保護単位（単位：件）
（国家文物局 http://www.sach.gov.cn/sachwindow/centerchina/ より作成）

種類 指定年	革命史跡と 革命記念館	石窟と 石刻	古建築	遺跡	古墳墓	その他	計
1961年	33	25	77	26	19		180
1982年	10	7	28	10	7		62
1988年	33	28	111	49	29		250
1996年	50	12	110	56	22		250
2001年	40	36	248	144	50		518
2006年	206	63	513	220	77	1	1080
2013年	329	110	795	516	186	7	1943

※　1996年から革命史跡と革命記念館にかわって近現代の史跡と代表的建築物とされた。

の名前が見られる。

革命という言葉は、全国重点文物保護単位（「国保単位」）のカテゴリーからも姿を消した［表2］。全国重点文物保護単位は1961年に始まった文化財保護の制度であり、文革で中断した後、1980年代から戦争や文革で破壊された歴史的建造物の修復が進むにつれて登録数が増加していった。第3回までは、革命史跡および革命記念館、石窟および石刻、古建築、遺跡、古墳墓の4分類であったが、第4回から革命史跡および革命記念館が近現代重要史跡および代表性建築という名称になり、鉄道や工場、大学、教会など革命と

［写真28］西安のシルクロード群像

［写真29］青島の五四広場

［写真 30］北京王府井

［写真 31］彫塑園の毛沢東像

は直接的な関係のない建造物も全国重点文物保護単位となり、保護の対象となった。

このように記念碑は外側からも内側からもイデオロギー性が薄まり、それにかわって地域性が全面的に現れるようになっていった。例えば、西安のシルクロード群像［写真 28］はシルクロードの起点であった長安の国際性を示すものであり、青島の五四広場にある 5 月の風［写真 29］という記念碑は、渦巻きで五四運動のダイナミズムを表現しているという。広場に巨大な記念碑が作られる一方で、北京の王府井のように伝統的な生活を送る人々の姿も見られるようになった［写真 30］。そして、西湖には一度破壊された一・二八淞滬抗戦陣亡将士記念碑が縮小サイズで再現された。

［写真 32］彫塑園の朱徳像

銅像だけを集めた公園も登場した。1987 年に江西省の井岡山烈士陵園に開園した彫塑園には、毛沢東［写真 31］や朱徳［写真 32］、彭徳懐、賀子珍

［写真 33］北京中華民族園

［写真 34］杭州宋城

［写真 35］長春映画城

［写真 36］長春彫塑公園

など井岡山革命根拠地で活躍した 19 名の彫像が置かれた。彫像の制作に当たったのは劉開渠や葉毓山、程允賢、潘鶴、曹春生らであり、素材には銅だけではなく漢白玉や花崗岩が用いられ、また、伝統的な彫刻の技術も取り入れられた。

1989 年、深圳に世界之窓や中華民俗文化村などの主題公園（テーマパーク）が開園すると、1990 年代以降、各地に多様な主題公園が作られた。民族をテーマにし民族園［写真 33］、歴史をテーマにした〇〇城や〇〇園［写真 34］、映画をテーマにした映画城［写真 35］などである。公園が多様化する中で、「彫塑」を主題とした彫塑公園が登場した[51)]［写真 36］。2004 年に世界彫塑公園を開園させた長春は、1997 年から長春国際彫塑作品展を開催

［写真 37］「友誼・和平・春天」

［写真 38］「農工之家」

し、城市彫塑を都市の特色として採用し、衛生広場や文化広場、時代広場などに大型の記念碑を建設した。2004 年に開園した長春世界彫塑公園には、葉毓山、潘鶴、程允賢、王克慶、曹春生の 5 名が共同設計した「友誼・和平・春天」［写真 37］や劉開渠の「農工之家」［写真 38］、世界各国の 320 の彫刻が展示された。

少し空きのある空間に建てられる孫文像や、文革で破壊された銅像の縮小版の再建、伝統的な人々の生活を描いた台座のない銅像やレリーフは写真撮影スポットとなっている。「城市彫塑はパブリック・アートである。公衆の鑑賞の要求と水準を満足させなければならない。同時に公共環境とも調和させなければならない。そうでなければ、美しさは損なわれてしまう。」[52] このように、プロパガンダとしての銅像から芸術性を求めるパブリック・アートへと変化していったのである。

6. おわりに

東アジアに銅像が誕生して 1 世紀半が過ぎた。従来、銅像で空間を装飾する慣習のない東アジアでは英雄顕彰碑からパブリック・アートへ名称を変えたとしても、公共空間と銅像の関係はどことなくぎこちない。日本では、1960 年代以降、パブリック・アートが広まり始めるが、実際には特定の理

［写真 39］長春文化広場の男性裸体像

［写真 40］萩市中央公園の山県有朋騎馬像

念もなく、多くの場合、一種のビジネスとして都市空間に銅像が建てられる[53)]。中国でも 1990 年代から増加している城市彫塑＝パブリック・アートは、○○彫塑芸術有限公司という企業が請け負っている。長春の文化広場に 2006 年、建立された高さ 4 メートルの男性裸体像は卑猥であるなど物議を醸した[54)]［写真 39］。

パブリック・アートとしての銅像が増える一方で、古い銅像の移設や復元が各地で進んでいる。日本では、1992 年、山口県萩市の中央公園に山県有朋の騎馬像が移築された［写真 40］。この騎馬像は、1927 年、陸軍参謀本部構内に置かれたものであるが、戦後、上野公園と井の頭公園に移築された後、山県有朋の旧居近くの公園に移設された。騎馬像を設計したのは、当時を代表する彫刻家の北村西望（1884 ～ 1987）である。北村は長崎の平和記念像を制作したことで知られるが、戦前には、肉弾三勇士像や長春（当時の新京）の児玉源太郎の騎馬像を制作し、20 世紀前半の銅像建立ブームを席巻した。北村が井の頭公園をアトリエとしたことから山県有朋像は、一時期、井の頭公園彫刻園に置かれた。1992 年に騎馬像が移築された際には戦前の軍国主義を象徴するような銅像の移設は望ましくないという批判があったものの、運動場や図書館に囲まれた騎馬像は、かつてのような威圧的な雰囲気を十分に醸し出すことはできない。

1990 年代以降、中国でも文革の際に破壊・撤去された銅像が復元されて

［写真 41］長春人民広場

［写真 42］杭州西湖

いる。元の大きさで作られることは少なく、西湖の北伐将士陣亡将士記念塔や淞滬戦役陣亡将士記念塔のように縮小されて再建される傾向がある。その背景には、道路の拡張や区画整理によって銅像を設置する公的な空間そのものが縮小したという物理的な理由と［写真 41］、巨大な銅像は時代に合致しないという社会的な理由が考えられる。台座の大きさは顕彰する人物の威信に比例することが多く、巨大な台座に立つ人物はそれだけ仰ぎ敬うことが無意識に要求される。

台座が小さくなったこと、あるいは、台座がなくなったことで、銅像は見上げるものから触るものへと変わった。文革期に作られた高い台座に乗る毛沢東像は、見上げるべき存在である雰囲気を醸しだしていたが、井岡山に作られた毛沢東像［写真 25］［写真 31］は若くて凛々しい姿をしており、観光客に触れながら写真撮影されることが多い。このように中国では銅像との記念撮影の際に、銅像に軽く触れることは一般的な行為である［写真 42］。そのためか、台座が低くなっても絶対に触れてはならない銅像の場合には、しばしば柵が設けられている［写真 12］。［写真 13］と［写真 43］の孫文像は植木鉢に囲まれており、軽く手を触れることができないようになっている。また、香港のブルース・リー像にも台座の周りに柵が設けられている［写真 44］。［表 1］のように公的に評価が定められている銅像がある一方で、暗黙の了解で手を触れてはならない銅像もある。

［写真 43］植木鉢に囲まれた孫文像

［写真 44］柵で囲われたブルース・リー像

［写真 45］杭州市革命烈士記念館

北京の八宝山烈士公墓は今でも権威ある公共墓地であるが、地方都市にある烈士陵園は太極拳やダンス、バドミントンなどの場所となっている［写真 45］。銅像と空間の関係は、公共空間がその社会において担う役目に応じて変化するものであり、また、銅像化される人物の評価によっても変化するものなのである。

註

1）本稿では、銅製だけではなく、大理石製やコンクリート製の人物像を総称して銅像とする。また、記念は中国語では「紀念」であるが、本稿では地名も含めて記念と記す。銅像建立の年代や制作者は主に『中国城市彫塑 50 年』（陝西人民美術出版社、1999 年）を参照した。

2）中国において偉人顕彰のための銅像は、上海に初めて登場した。『上海軼事大観』の「銅像小志」には、パークス（Harry Parkes、巴夏礼）、プロテ

（Auguste Léopold Protet、卜華徳）、李鴻章、ハート（Robert Hart、赫徳）の4体があったと記されている。陳伯煕『上海軼事大観』上海書店出版社、2000（1924）年、121ページ。遊佐徹は、パークスやプロテの銅像と違い、徐家匯の李公祠の李鴻章の銅像は上海の人々にとって特別な意味を持っていたことを指摘している。パークスは英国外交官として租界の発展に功績を残したことで1890年、銅像が建立された。また、仏国海軍総督のプロテは、仏国租界拡張に尽力したことから、1870年、仏国租界の警察署中庭に銅像が建てられた。これらの銅像は上海の人々にとってはランドマーク程度のものであったが、李鴻章の銅像には除幕式の前から高い関心が寄せられ、絵入りの新聞記事が掲載された。そして、後に上海の観光名所となった李鴻章像は、中国人に自らの手で銅像を制作する意識を芽生えさせ、曾鋳像など7体の銅像を誕生させたという。遊佐徹『蝋人形・銅像・肖像画――近代中国人の身体と政治』白帝社、2011年、33～43ページ。

3）平瀬礼太『銅像受難の近代』吉川弘文館、2011年、17ページ。

4）若桑みどり『イメージの歴史』ちくま学芸文庫、2012年、420ページ。

5）余樹勛『論説公園』中国建築工業出版社、2011年、1ページ。

6）孫剣氷「年中行事からみる清時代における生活の場としての中国私邸庭園の情景に関する研究」『ランドスケープ研究』72巻5号、2009年、939-942ページ。

7）Shi, Mingzheng “From Imperial Gardens to Public Parks: the Transformation of Urban Space in Early Twentieth-Century Beijing.” *Modern China*, Vol. 24 No. 3, 1998, pp. 226-227. ジェスフィールド公園は、フォグ社（H. Fogg & Co.、兆豊洋行）が1914年に建設した私的な庭園の一つである。後に共同租界工部局によって購入され、兆豊公園や梵皇渡公園などの名前で呼ばれた。フォグ社は、静安寺から梵皇渡までのジェスフィールド路（梵皇渡路）を修復し、ここにイギリス式の公園を築いた。公園内には中国式・日本式庭園や植物園、動物園、音楽亭なども設置された。1942年、中山公園と改名され、現在に至る。当時、公園を管理したのは、公務局（Public Works Department）の中の公園管理課（Parks and Open Spaces）であった。公園管理課は、膠州公園（Kiaochow Park）、バンド公園（Bund Park）、虹口公園（Hongkew Park）、匯山公園（Wayside Park）、四多達公園（Studley Park）、蘇州児童遊園（Soochow Children’s Park）、南洋児童遊園（Nanyang Children’s Park）、児童遊園（Children’s Park）、市営養樹園（Municipal Nurseries）を管理した。野口謹次・渡邊義雄『上海共同租界と工部局』日光書院、1939年、56～58ページ。

8）丸山宏『近代日本の公園史の研究』思文閣出版、1994年、56～57ページ。

9）溝口雄三「中国思想史における公と私」佐々木毅・金泰昌（編）『公共哲学Ⅰ　公と私の思想史』東京大学出版会、2001年。東アジアの「公」の概念があいまいであるのと同様に、英語のparkの概念も悩ましいものである。なぜなら

ば、Park は狩猟地など王室の私的財産であったというイメージだけではなく、労働者階級の人々のための民主的な空間という側面も持つためである。Karen R. Jones & John Wills, *The Invention of the Park: from the Garden of Eden to Disney's Magic Kingdom*. Polity Press, 2005, pp.2-3.

10）小浜正子『近代上海の公共性と国家』研文出版、2000 年。

11）丸山、前掲書、60 ページ。

12）薛理勇、前掲書、390 ページ。上海の地方史家である薛理勇氏は、「犬と中国人は入るべからず」（Dogs and Chinese Not Admitted）の立て札が捏造品であったことを述べている。1928 年、パブリック・ガーデンに中国人の入園が認められる以前、西洋人の付き人を除く中国人の入園と、自転車と犬の入園が禁止されていたのは事実であるが、中国人と犬を同視した記述ではなかった。「犬と中国人は入るべからず」の立て札は愛国主義教育のために作られた捏造品であり、薛氏は 1989 年にその立て札を壊したという。Bickers, Robert A & Jeffrey N. Wasserstorm "Shanghai's 'Dogs and Chinese Not Admitted' Sign: Legend, History and Contemporary Symbol." The China Quarterly, 142, 1995, 444-466、石川禎浩「"犬と中国人は入るべからず" 問題再考」伊藤之雄・川田稔編著『環太平洋の国際秩序の模索と日本』山川出版社、1999 年。

13）薛理勇（主編）『上海掌故辞典』上海辞書出版社、1999 年、394 ページ。

14）同上、400 ～ 401 ページ。

15）陳蘊茜・呉敏「殖民主義影響下的上海公墓変遷」蘇州大学社会学院（編）『晩清国家与社会』中国社会科学文献出版社、2007 年、123 ～ 125 ページ。

16）同上、130 ～ 134 ページ。

17）「孫先生葬儀大到決定」『民国日報』1925 年 3 月 14 日、「孫先生今日移霊社稷殿」『民国日報』1925 年年 3 月 19 日。

18）何彬「現代の表象と伝統の変遷——北京の墓地と葬法に関する考察」韓敏（編）『革命の実践と表象——現代中国への人類学的アプローチ』風響社、2009 年、205 ページ。

19）中山公園管理処『中山公園志』中国林業出版社、2002 年、117 ～ 119 ページ。これらの記念碑は後に撤去され、現存しない。

20）「今日之五卅紀念」『民国日報』1926 年 5 月 30 日。

21）薛理勇、前掲書、385 ページ。

22）「昨日陳英士先生紀念大会紀」『申報』1927 年 5 月 19 日。

23）「陳英士殉国紀念大会」『申報』1930 年 5 月 19 日。

24）「陳英士紀念塔」『申報』1930 年 11 月 4 日。

25）Liping Wang, "Tourism and Spatial Chang in Hangzhou, 1911-1929." in Joseph W. Esherick (ed.) *Remaking the Chinese City: Modernity and National Identity, 1900-1950*. University of Hawai'iPress. 1999, pp. 112-119.

26）趙大川編著『閲読首届西湖博覧会』（文化江南叢書・王水福主編）、西泠印社、2003 年、217 ページ。孫文の像は、1929 年に日本滞在中の孫文と交流のあった梅屋庄吉によって寄贈されていた。この像は、広州の中央陸軍軍官学校（黄埔軍校）の大礼堂前に設置され、1930 年 10 月 4 日、除幕式が行われた。「総理銅像掲幕典礼」『民国日報』（1930 年 10 月 4 日）。孫文の像は、この他に南京の孫文記念館、広州の中山大学、アモイの国父記念館に設置された。
27）鄭重『林風眠伝』（海派大師伝記叢書・祝君浪編）、東方出版中心、2008 年、28 ～ 44 ページ。
28）馮俊『西湖博覧会専輯』（西湖文献集成・王国平編）、杭州出版社、2004 年、112 ページ。
29）「陳英士先生銅像掲幕典礼——参預者五千余衆」『民國日報』1929 年 6 月 8 日。
30）殷双喜『永恒的象徴——人民英雄紀念碑研究』河北美術出版社、2006 年。
31）薛理勇、前掲書、389 ～ 390 ページ。
32）「華北人民政府通令清明節隆重紀念烈士」『人民日報』1949 年 3 月 18 日、「今日烈士節　華北人民政府　征集烈士史料」『人民日報』1949 年 4 月 5 日。
33）「関于革命烈士的解釈」『人民日報』1950 年 10 月 15 日。
34）「革命烈士家属革命軍人家族優待暫行条例」『人民日報』1950 年 12 月 14 日。
35）「王荷波等十八烈士移葬京郊革命公墓　周恩来総理親臨主祭」『人民日報』1949 年 12 月 12 日。
36）イーゴリ・ゴロムシトク『全体主義芸術』水声社、2007 年、422 ～ 423 ページ。
37）殷双喜、前掲書、17 ～ 18 ページ。
38）江豊「美術工作的重大発展」『人民日報』1954 年 10 月 11 日。
39）田志和『永恒的懐念——中国土地上的蘇聯紅軍碑塔陵園』大連出版社、2010 年。
40）1955 年 5 月 8 日に除幕式が行われた。「歓送駐旅順口地区蘇連軍回国」『人民日報』1955 年 5 月 29 日。この記念塔は、1999 年に旅順のソ連軍烈士陵園に移築された。
41）「旅順中蘇友誼塔挙式隆重落成典礼」『遼寧日報』1957 年 2 月 15 日。
42）鄒躍進『新中国美術史（1949-2000）』湖南美術出版社、2002 年、114 ページ。
43）この広場はかつて、奉天大広場と呼ばれ、日露戦争記念碑（明治三十七八年戦役記念碑）が置かれていた。広場は、東京駅を真似て作られた奉天駅（現、瀋陽駅）から北東に延びる道路と結ばれており、ヤマトホテル（現、遼寧賓館）が広場に面していた。
44）牧陽一・松浦恆雄・川田進『中国のプロパガンダ芸術——毛沢東様式に見る革命の記憶』岩波書店、2000 年、144 ページ。
45）八束はじめ『ロシア・アヴァンギャルド建築』INAX 出版、1993 年、449 ページ。
46）Jiang Jiehong (ed.) *Burden of Legacy: From the Chinese Cultural Revolution to*

Contemporary Art. Hong Kong University Press, 2007, p.7.

47）松村伸『中華中毒――中国的空間の解剖学』ちくま学芸文庫、2003年、260～262ページ。

48）「在上海挙行宋慶齢影像掲幕典礼」『人民日報』1984年1月28日。

49）「秋瑾、徐錫麟等烈士陵墓重新修建」『浙江日報』1981年8月31日。

50）于美成等編『当代中国城市彫塑・建築壁画』上海書店出版、2005年、26～32ページ。

51）北京市石景山彫塑公園（1985年）、天津市国際彫塑公園（1996年開園）、広州市彫塑公園（1996年開園）、青島市彫塑長廊及名人彫塑園（1997年開園）、上海市龍華烈士陵園彫塑（1998年開園）、桂林市国際彫塑公園（1997年開園）などがある。

52）馬時雍『杭州市城市彫塑』杭州出版社、2008年、2ページ。

53）樋口正一郎『都市と彫像――欧米にみる公園・広場と街づくり』鹿島出版社、1994年、7ページ。

54）文化広場は、かつて日本占領期の都市計画において建設された宮廷造営地前の順天広場であった。1945年以降、広場は地質宮広場となり、長春最大の都市広場となった。1996年、長春市は地質宮広場を文化広場と改名し、中央に太陽島という高さ37メートルのモニュメントを設置した。

From Propaganda Art to Public Art: Shifting Relationship between Bronze Sculptures and Public Spheres in Modern China.

Yoko, TAKAYAMA

This article examines the transformation of bronze sculptures have gradually changed from propaganda art to public art in modern China. The style of Western fine art style such as bronze sculptures, which was rapidly imported by younger Chinese artists who had studies abroad, was adopted to commemorate the martyrs of the socialist revolution in the early 20th century. The public parks and the public squares, where these western sculptures were created, had not existed in traditional China. Rather to amuse colonialists in Shanghai, the British and French colonial governments sculpted bronze sculptures to commemorate colonial officers. This motivated Chinese citizens to create their own parks and statues as well.

Later, the Chinese Communist Party frequently employed the combination of public spheres and monuments as a propaganda art. Named as the Mao Style, this movement was established as an official art style at the 1942 Yan-an Conference. In the early 1950s, the Chinese artists adopted Soviet Socialist Realism, which was officially initiated by Stalin in 1933 to express the Communist ideology to continually create bronze statues, huge monuments, and propaganda posters of the martyrs of the revolition.

Following the end of the Cultural Revolution, much criticism was directed toward the Mao Style, because of its excessively ideological style lack of originality, and esthetics. Nevertheless, the western sculptures in public spheres have originated in China, and people enjoy the statues as a form of public art. While these statues

were damaged for their anti-communist or feudal styles, they are in this decade frequently reconstructed in some large cities. However, these reconstructions are seldom similar to the originals, which are not considered to suitable for the contemporary urban circumstances. Public parks are not only the places that commemorate martyrs of the revolution but also the places where citizens play badminton and traditional Chinese pugilism. In addition, heavy traffic often renders public squares with bronze statues often narrow. People prefer the intimate statues that express the traditional life to those of the martyrs of revolution positioned on the large pedestals, which one must look up to see. In this way, the relationship between bronze statues and public spheres shifted to reflect the socio-cultural changes in modern China.